# 著作権保護コンテンツ

『ナミチカの
きのこがり』
作／降矢なな
1,430円（童心社）

『シオドアと
ものいうきのこ』
作・絵／レオ・レオニ
訳／谷川俊太郎
1,650円（好学社）

「サル／コシカケだよ」
「おさるさんが　すわるの？」

「きのしたにも　いっぱい　はえてる！」

「これは　ヤマドリタケモドキだ。クリームスープにすると　とっても　おいしい。
たくさんあつめて　おばあちゃんに　スープを　つくってもらおう」

おいしい絵本

16

食べることが大好き
おいしいものが大好きな作家
中島京子さんがおいしい絵本をご案内。
おいしいものを食べているときの
幸せな気持ちもお届けします。

文／中島京子

## きのこ絵本は、どれもちょっとだけホラー

秋の味覚はいろいろあるけれど、絵本と相性のいい食べものというと、思い当たるのが、きのこだ。

きのこって、ちょっと不思議な食べものである。そもそも菌類というのが、よくわからない。菌類の中でもきのこは、「真菌類」とか「真核生物」とか呼ばれて、カビと酵母が、仲間のように扱われているけれど、カビと酵母は、なにか別の食べものとくっついている感じがするのに、きのこだけはちょっと野菜の一種みたいな顔をしてスーパーマーケットの売り場に並んでいる。

それに、きのこには「毒きのこ」という、食べた人を死に至らしめるような危険なやつが存在するし、「マジックマッシュルーム」みたいに、幻覚作用を引き起こすものもある。ちょっと、ただものではない感じ。

だけど、ちょっとほかのものでは代用できない食感とうまみを持っているから、レストランでメニューに「きのこ」という文字を発見すると、瞬時に「おいしそう！」と、脳が反応してしまう。

わたしはスーパーや青果店に並んだものしか知らないけれど、きのこは山や森で「狩る」ものだと思っている人もいる。

スウェーデンを本拠地にしているアーティストの友人がいて、少し前に帰国した際、干しきのこをたくさんお土産に持ってきてくれた。なんでも彼女は、きのこを見つけるのがたいへんじょうずなんだそうだ。

スウェーデンの人たちはきのこが大好きで、森だけではなくて公園なんかでもしょっちゅう、きのこ狩りを楽しんでいるらしい。公園だからきのこを採ってはいけません、なんて野暮なことは言われないのだそうだ。そして、森の中に、みんな自分のお気に入りのきのこ生息地を持っていて、ぜったいに人には言わないんだという。

『ナミチカのきのこがり』を読んだとき、彼女のその話を思い出した。降矢さんは、スロヴァキア在住の絵本作家だけれど、やっぱり、自由自在にきのこ狩りを楽しんだりするのだろうか。

ナミチカは、おじいちゃんといとこのアンドレといっしょに森にきのこ狩りに行く。さいしょにおじいちゃんが「もりのなかでは　わしのそばからはなれずにいるんだよ」という警告を発するから、うーん、何かが起こるかも、と読者は身構えるのだけれども、果たして彼女はきのこを探すうちに迷子になってしまう。

そこに登場するのは、まぁるく並んで踊りだす赤いきのこたちだ。

この赤いきのこが、なんともかわいい。どことなく、草間彌生の作品のようでもあるし、幻覚を引き起こすというベニテングタケではないかなという気もする。

じっさい、ナミチカはきのこに惑わされて、いつのまにか迷子になってしまうのだから、彼女がそれを食べたかどうかわからないけれど、幻覚を見たとは言えるのかもしれない。

この、きのこの不思議さは、絵本の世界と相性がいい。ただ、そのぶん、きのこの「おいしさ」みたいな要素は、物語から若干、後退していくようなところはあるかもしれない。

もう一つ、印象的なきのこ絵本として、レオ・レオニの『シオドアとものいうきのこ』を挙げておきたい。これも、きのこのおいしさとは無縁のところに物語が作られているのだけれど、これを読みながらわたしは、レオ・レオニと「平行植物」について、思い出したのだった。レオ・レオニは、子ども用の絵本ではない『平行植物』（工作舎）という本を出している。「時空のあわいに棲み、われらの知覚を避ける植物群」という定義のなされた、架空の植物に関する奇書なのだ。

昨年秋から今年の頭にかけて、東京都板橋区立美術館で、大規模な展覧会『だれもしらないレオ・レオーニ展』が開かれた。『スイミー』や『フレデリック』（ともに好学社）の大ファンであるわたしも、これはぜひ、と駆けつけたのだったが、ここにもレオ・レオニが考え出した「平行植物」に関する展示がたくさんあって、この天才絵本作家にして敏腕グラフィックデザイナーであった素敵な人物の頭の中をのぞき見するような楽しさがあったのだった。

さて、レオ・レオニの絵本に出てくるのはきのこだから、平行植物ではないけれども、想像上の奇妙なものという点で、共通性がありそうだ。じっさい『平行植物』には、キマグレダケなんて名前のついているものもあるし、見た目がきのこっぽいものもある。

ところで『シオドアとものいうきのこ』は、「クィルプ！」という言葉（？）を口にする、奇妙な青いきのこと、それを見つけた臆病なねずみのシオドアの物語だ。今度のきのこは真っ青である。

現実の世界でも、色の鮮やかなきのこは食用に適さないものが多いというけれど、絵本ならではのきれいな色をしたきのこは、やっぱりちょっとホラーである。

シオドアがきのことどのような顛末に至ったかは読んでもらうとして、「おいしい絵本」としては、ナミチカの食べるきのこのクリームスープに思いを馳せたい。おばあちゃんの作るおいしそうなスープ。バターで炒めたきのこを煮込んで、牛乳を入れて塩コショウ、という感じかなあ。きのこから出るうまみで絶品スープになるんだろうな。おじいちゃんとアンドレが作る干しきのこも、いずれ、ナミチカを幸せにする一品になるに違いない。


中島京子
なかじま・きょうこ

1964年、東京都生まれ。作家。2003年『FUTON』（講談社）でデビュー。10年『小さいおうち』（文藝春秋）で第143回直木賞受賞。15年『かたづの！』（集英社）で第3回河合隼雄物語賞、『長いお別れ』（文藝春秋）で第10回中央公論文芸賞受賞。ほかに『キッドの運命』（集英社）、『ムーンライト・イン』（KADOKAWA）など多数。

著作権保護コンテンツ

特集

# 絵本で“おうち時間”を楽しむ

**新型コロナウイルスの流行による行動の制限で、**
**大人も子どもも“おうち時間”が増えました。**
**そこで、おうちで過ごす時間を豊かにしてくれるような絵本を**
**これまで小誌であまり取り上げられなかったジャンルからご紹介します。**

イラスト／柿本幸造

たとえば……

## 工作

『はじめてでもカンタン！
手づくり布マスク』

著／手づくり布マスク編集室
1,320円（理論社）

子どもでもできる、布を折るだけのマスクから、手縫い、ミシンかけで仕上げるものまで、作り手の準備できるものに応じて、わかりやすいプロセスが写真で見られます。

## アート

『盆栽えほん』

作／大野八生
1,540円（あすなろ書房）

ただ木を育てるのとは違って、盆栽は小さな鉢の中に自然の風景を表現しています。庭がなくてもできる盆栽、入門絵本で「和」の心を育ててみませんか。

## 料理

『つくろう！ つくろう！
おべんとう』

作／若菜ひとし・きよこ
1,100円（ひさかたチャイルド）

ホカホカごはんを手のひらにのせて、ぎゅっとおにぎりを作ります。おかずは卵焼きにタコさんウインナーに、ブロッコリーも入っています。おいしそうなお弁当ができました。

## 知識絵本

『子どもテツガク』

著／小川仁志　絵／林 ユミ
1,980円（主婦の友社）

哲学とは深く考える方法。どんなことも乗り越えていける“考える力”は、子どものころから習慣づけておくことが大事。学校では教えてくれない86の「なぜ」を考えて、子どもの生きる力をのばします！

絵本を使って、楽しいおうち時間を！

著作権保護コンテンツ

# たかいよしかずさん 作品を語る

**子どもたちの目を引きつけるキャラクターと色使いの作品たち。赤ちゃん絵本や音の出る絵本、児童書の挿絵なども含めると、150冊以上も。どれもこれも、たかいさんの幼少期の気持ちや思い出がぎゅっと詰まっています。**

## 10年かけて目標達成 12冊のシリーズに！

「くろくまくん」を使って春夏秋冬の季節を表現したいと思い、まず秋と冬の2冊を出すことになりました。それが『おさんぽ くろくま』と『ゆきのひ くろくま』です。

僕が最初に出した『ゆきのひ くろくま』のラフの文章は、編集者さんに「絵を見てわかることは文章を省きましょう」と言われ半分くらいカットされました（笑）。その後、夏の『うみべの くろくま』、春の『ともだち くろくま』を出版。くもん出版さんから「人気があるので、続けませんか」というありがたいお話をいただき、「それなら12カ月のくろくまくんにしたいです」と言ったところ、「おはなしがおもしろければ続きますかね～？」と言われビクビクしましたが、10年かけて目標達成！　12冊出版することができました。

『おさんぽ くろくま』
『ゆきのひ くろくま』
『うみべの くろくま』
『ともだち くろくま』
『クリスマス くろくま』
『おたんじょうび くろくま』
各880円（くもん出版）

## 妖怪と虫捕りが大好きすぎる子どもでした

僕はもともと妖怪がめっちゃ好き。国土社さんから「妖怪の絵本を出したい」と言われて、「やります、やります！」と勢いで返事をしたら、「1年で5冊出すけどやれます？」と返され、驚愕したのを覚えています。

『わくわくなつやすみ』に虫捕りが入っているのは、子どものころ虫捕りが好きだったから。好きすぎて19時くらいまで虫捕りをして家に帰ったら、お母さんが家に入れてくれなくて……。しょうがないや、とまた虫捕りに行って21時に帰ったら、さすがにあきれられましたね。

当時僕は団地に住んでいて、夜でも蛍光灯が廊下についているんです。そこによく虫がいっぱい落ちていて……、そういう子どものころの記憶が今の僕の絵本を支えています。

『ようかいむらの じごくえんそく』
『ようかいむらの びっくりゆうえんち』
『ようかいむらの わくわくなつやすみ』
『ようかいむらの だいうんどうかい』
『ようかいむらの たのしいおしょうがつ』
各1,650円（国土社）



## 子どもたちに、僕にしか伝えられないことを伝えたい

『どんなきもち？』
1,540円（大日本図書）

大阪芸大時代にせっかくだから教員免許をとろうと、母校に教育実習に行ったんです。そのとき、学校の先生って8割が生活指導で、教科の指導は2割しか必要ない……。だから僕に先生の仕事は無理だなと思いました。

でも、何か僕にしか伝えられないことをやりたい、という思いはありました。そのとき、将来は絵本作家になりたいとはじめて思ったんですよね。

2015年に、川崎で中学生の子が18～19歳の仲間に殴り殺されるひどい事件があって、ありえへん！　とめちゃくちゃ腹が立って。もしこの子がいい友だちに巡り合えていたら、こんなことにはならなかったんちゃうかな？と思い、この『ともだちのつくりかた』を描くきっかけになりました。その後、なぜ勉強をしなきゃいけないのかな？を伝えたくて、『すきなことのみつけかた』と『ゆめのかなえかた』を。そして、相手の気持ちがわかることはすごく大事だなと思い、『どんなきもち？』を描き、シリーズになりました。

『ゆめのかなえかた』
『ともだちのつくりかた』
『すきなことのみつけかた』
各1,540円（大日本図書）

「半分はデザイナーの自分がいて、半分は作家の自分がいる。デザイナーの僕がいろんな興味あることをぶわーっと引っぱってきて、それを作家のほうの僕が料理して、自分のアレンジを加えていくみたいな感じ。そんなもののつくりかたです」

『音のでるおしごとえほん でんしゃ』
3,300円（三起商行）

『うごくくるまえほん パトロールカー』
1,320円（三起商行）

『あかちゃん布えほん かお』
1,320円（三起商行）

サイン本プレゼント Webまたはアンケート用紙へ

最新刊

『ゆめたんの ぐっすりまほうと だいぼうけん』
1,320円（主婦の友社）

## スペシャルな枕で ベッドで読んでほしい絵本

最新刊は、スタンフォード大学医学部精神科教授の西野精治先生監修の〝脳が眠る枕〟とセットになる絵本を、というコンセプトでお仕事をいただきました。

実際にその枕を送っていただいたのですが、感触がめっちゃ冷たくて、よく眠れてビックリしました。実はもうすぐ締め切りで、7月1日入稿！（取材時点6月24日）　バタバタです（笑）。